



Title	ビュートウ博士の講演『アメリカ合衆国の児童虐待の実情』
Author(s)	立賀, 英子
Citation	大阪公衆衛生. 1988, 54, p. 10-11
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83706
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

人 物 往 来

ビュートウ博士の講演

『アメリカ合衆国の 児童虐待の実情』



ビュートウ博士(左)と張 知夫氏(通訳)

11月19日(土)、府立看護短期大学において、表記のテーマでイリノイ大学教授ビュートウ(Kathleen Buetow)博士の講演が行われた。(Child Abuse 研究会・大阪精神衛生協議会共催、通訳・張知夫氏)。本誌52号の『チャイルド・アブユースの問題』で関心をそそられていた私が、講演会を聞きに行こうとしてみると、副編集長が「同じ行くなら取材をして来い」とおっしゃる。

バラエティに富む聴衆

取材に訪れた私が驚いたのは、こういう特殊なテーマに70名もの熱心な聴衆が集まっていたことである。看護婦・助産婦・ケースワーカー・医師・心理判定員と職種もさまざまなら、勤務先も病院・施設・保健所・児童相談所とバラエティに富む。

ビュートウ博士は小児科医であって、公衆衛生学博士の学位をもち、現在はイリノイ州立大学関連病院の児童保護チームの責任者で

あり、州の虐待予防委員会の委員も兼ねておられる。

上品で温和な中年婦人とお見受けした博士だったが、講演が始まるとじつに力強い話しぶりで、ご自分の仕事に対する熱意と使命感が、ひしひしと伝わってきた。

ショッキングなスライド

博士の講演では数多くのスライドが供覧された。熱湯、鞭、アイロン等によるひどい傷痕や、骨と皮ばかりになった子供の虚ろな眼を見るのは私にはショックだった。さらに、綿密な調査による発生件数の統計は、事態の異常な深刻さを教えてくれた。

児童虐待と一口にいても、そこには

- ① 身体的な虐待
- ② Neglect (子供の基本的ニーズの無視)
- ③ Failure to Thrive (発育阻害状態)
- ④ 性的な虐待
- ⑤ 情緒的な虐待

と、いくつかのパターンがある。

さらに、妊婦がアルコール・薬物の中毒者やヘビースモーカーである場合、それは『胎児への虐待』になり得るとの話に、そこまで考えるのかと感心させられてしまった。

虐待の発生の背後には、社会のストレスが家庭内のストレスとなって蓄積し、人間関係を歪め、そこにいろんな形の「引き金」が作用して顕在化するというメカニズムが見られる。したがって個々のケースを診断し援助して行くにも、多職種によるチーム・アプローチが不可欠となる。

日本でも早期の取り組みを

アメリカでは州法で関係者からの報告の義務づけや、犠牲者の保護などが定められているということだが、日本ではまだまだ行政の保護、援助、法律の整備というところまで進

んでいない。

しかし聴衆の中の児童相談所や施設の方に伺ってみると、かなりの問題が存在していることはすでに明らかだという。それが大きな社会問題となってから対応を考えるのではなく、予防、早期発見の観点から、早くもっと多くの人に児童虐待のことを知ってほしいと痛感した。

今回ビュートウ博士は、夫君（植物害虫学の専門家）が国際会議に参加するのに同伴して来日されたそうだが、この児童虐待問題について、今後も教えていただく機会がほしいというのが、取材を終えた私の卒直な感想である。

（立賀英子）